

歴史学研究 第607号(1990年6月)抜刷

エジプトにおける日本近代史研究

ラウーフ・アッバース・ハーミド

エジプトにおける日本近代史研究

ラウーフ・アッパース・ハーミド

エジプトおよびアラブ諸国全般は、日本研究、日本史研究に関心を抱き始めたのが世界の中でも遅い国々の部類に属する。これは、アラブ世界が文化的・地政学的には地中海圏に属していることに起因する。アラブ世界にとって、影響を与え、あるいは与えられる相手、闘争や平和といった関係を取り結ぶ相手はヨーロッパであった。そして、この文化的・地政学的圏は、日本の属している極東圏とは遠く隔っていた。他方、日本の側もアラブ世界について、前世紀末までは、西洋の文献から得られた限られた知識しか持ち合わせていなかった。日本がアラブ地域に対して国益上の観点から関心を抱き始めたのは、やっと第一次世界大戦終結後のことであったが、その際にも、当初、関心の対象は、その国土にスエズ運河という——日本にとって重要な——存在を擁するエジプトに限られていた。日本が繊維製品をはじめとする自国製品の市場として、また石油の供給源としてアラブ東洋全般に関心を抱き始めるのは、1930年代以降のことであった。

しかしながら、エジプトおよびアラブ世界における日本のイメージは、1905年に日本がロシアに対して収めた勝利以来、輝かしいものであった。日本の勝利の中にアラブは、東洋の諸人民が西洋を向うに回して抱負を達成し、東洋のかつての栄光を取り戻す可能性を見出したのである。日本の勝利は当時の最も偉大なアラブ詩人の一人であったハーフィズ・イブラーヒーム (Ḥāfiẓ Ibrāhīm) に靈感を与え、彼は日本の勝利を歌い、「ロシア熊の皮を剥ぐ」ことに成功した日本人民を称える詩を書いた。同様に、エジプトの国民的指導者であったムスタファー・カーミル・パシャ (Muṣṭafā Kāmil) は、1905年に『昇る太陽 *Al-Shams al-Mushriqa*』と題する小冊子を発表した。彼はこの冊子の中で明治期における

日本の覚醒について語り、日本国民を称賛し、エジプト国民に——国土を占領しているイギリスに対して勝利を収めることができるよう——日本の経験から学ぶことを要求した。

日本のこの勝利はまた、エジプトの陸軍士官学校の教官を務めていたアフマド・ファドリー (Aḥmad Faḍlī) という一大尉をも魅了した。彼は1908年に日本に赴き、1911年頃まで東京で生活し、帰国後、『日本の進歩の秘密 *Sirr Taqaddum al-Yābān*』と題する著書を出版した*。これは明治期の日本についてアラビア語で書かれた、初めての書物であった。また、この2年前にはアフマド・ファドリーはやはりカイロで（おそらく彼自身はまだ東京に滞在中であったが）、桜井という日本の将校の筆になる書物の翻訳を『大和魂 *Al-Nafs al-Yābāniya*』という題で出版している。この本への序文の中でアフマド・ファドリーは、著者の将校、桜井は自分の個人的友人であること、原著に寄せた序文の中で大隈伯爵（大隈重信—編集部注）が桜井を称賛していること、を述べている。

『日本の進歩の秘密』（カイロ、1911年）は152頁から成り、外国事情入門書としての性格を有しているが、同時に、著者が滞在中に日本社会から受けた諸々の印象も記されている。書物の内容からは、著者が日本語や日本の風習・伝統・生活様式に通じていたことが窺われる。これ以前に日本に関する類書が存在しなかったため、著者はまず第一章では、古代以来の日本の歴史について簡単に紹介している。第二章では日本の信仰として神道について述べ、第三章では日本の自然、住民の性質・風習について述べている。つづく第四章は「光の時代 *Ahd al-Nūr*」と題され、明治天皇とその治世に関する記述にあてられている。この章には、国会開設に関する詔書、

